

万葉の川心まんようかわごころ

横浜市立羽沢小学校教諭 澤井 園子

東歌―常陸国の相聞往来の歌―

(巻第十四 三三九二番歌)

筑波嶺の 岩もとどろに 落つる水
よにもたゆらに わが思はなくに

ある土曜の朝、この歌に詠まれた「落つる水」とは筑波山を流れ落ちる男女川のことだと知り、その始まりを探す小さな旅に出た。思い立って地下鉄の改札を通ったのはお昼すぎ。秋葉原からつくばエクスプレスで五十分、そこからバスでさらに四十分。「お母さんはいつつも、突然なんだよね。」「無理して一緒に来なくても良かったのよ。」「いや一人は淋しいっていうか、心配っていうかさ・・・。」生まれて十年も経つと、母の無謀さをすっかり心得、娘は相棒の顔をして、揺れる車内でお茶を飲んでいる。バスを降り、筑波山神社に向かう途中で、まさに岩の間から吹き出すようにして流れ落ちる水を見た。小さな橋の欄干に男女川とある。「筑波山の、岩もとどろきごうごとと落ちる水のように、揺れ動いて定まらないとは、私は決して思わないことだ。二人の仲は決まっている。」

筑波山といえば、ロープウェイで女体山、ケーブルカーで男体山に気軽に登れる観光地のイメージだった。ガマの油売りの口上も有名だ。ケーブルカーで山頂駅まではたった八分。天気の良い日は関東平野を見渡す絶景が三六〇度広がっている。万葉の頃はというと、この山で神のまつりとして嬥歌が行われていたことが有名なのだ。嬥歌とは歌垣の東国での呼称で、春と秋に



若い男女が行き集い、愛欲の歌を唱和し、舞踏して楽しむ行事である。これで共寝する相手が見つかからないようでは帰るに帰れないと、当時常陸国庁に赴任していた高橋虫麻呂も驚いたという。もちろん虫麻呂は、豊かな空想力で美にふける歌人だから、本当に焦って探したわけではない。咲き誇る花々または燃えるような木々の葉に彩られた山に登り、持ち寄り「ごちそうとお酒、交わし合う歌、艶めく人、踊りの渦、異国の風にうっとり」と酔いしれたことだろう。東歌には田舎言葉のあたたかさがある。労働や生活に根付いた人びとの思いが山や川とともにある。「山の霞のように行き過ぎることができないでいるあのお人と、共寝しておやりなさいな(女性の労働歌)」「筑波嶺の驚のように、あなたに会えなくて泣いて過ごしています」「筑波山のあちらこちらに番人を据えるように母は監視していたけれど、あの方に魂が会ってしまったの」など筑波嶺を詠んだ歌は六首続く。

山頂から二十分ほど下りた所に男女川の水源を見つけた。岩と岩の隙間から染み出るように流れていた。もう日は西に傾き、地平線近くが一面赤く染まった。それでも、トレーニンングで素早く登っていく人、幼い子を連れたお父さん、若いカップル、山支度の仲間同士と、登山道では様々な人とすれ違いあいさつした。歌碑は、少し離れたつくば市大久保のつくばテクノパーク大隅に点在している。

今は「結婚活動・コンカツ」というらしいが、ドーナツをほおぶるこの娘もいつか、「恋ぞつもりて淵となりぬる」せつなさを知るのだろう。帰りのバスを待つ高台から望む夜景は美しく、言葉をなくした。